

ジョルジエ・アマード著『ドナ・フロールとふたりの夫』より (3)

— 第一部幕間 —

尾河直哉

Tradução japonesa de *Dona Flor e seus dois maridos* de Jorge Amado (3)

NAOYA OGAWA

(277)

キーワード

ブラジル現代文学 (literatura contemporânea brasileira)、
北東部文学 (literatura nordeste)、バイーア文化 (cultura baiana)、
ジョルジエ・アマード (Jorge Amado)

幕間

ヴァアディーニョの死に涙する匿名詩人——具体的な証拠をもとに、この無名の吟遊詩人の正体がついにここに明かされる——にかんする(いっけんむだな)寸評

(計り知れない男、ロバト・ジュニアが熱弁をふるう)

いや、時がいくら流れたところで、文学界の解きえぬ謎になるこ

となどきつとないでしょう。何世紀もたつてから大学や学者、研究者や伝記作家、哲学者や批評家が挑む世界レベルの文化的な謎になることはなからうし、調査研究や社交のネタになったり、株式市場、学会、教授陣、歴史学者の話題になることも、安易な暮らしを求めるごくつぶしたちの話題になることもないでしょう。新たなシエークスピアなどでもない。彼らにテーマとインスピレーションを提供するささやかな出来事ほどの、取るに足らない謎。ヴァアディーニョの死とはそんなものです。

とはいえ、サルヴァドールの最良の文学者たちから疑問が呈され、その疑問をめぐって論争が起きました。「ワルドミール・ドス・サントス・ギルマンイス、つまりヴァアディーニョが娼婦と友人にとつて決定的な意味をもつその死に捧げる哀歌」を町の詩人のだれが作ったのか、という論争です。論争はたちまち燃え広がり、先

鋭化し、人々の対立を煽り、意趣返しと辛らつな言葉の応酬を惹起し、ついには平手打ちにまできわまりました。とはいえ、議論も怨恨も、怪しいことも確実なことも、肯定も否定も、侮辱も平手打ちも、すべてはバールのテンプルの周囲にとどまっていた。夜も更けるまで冷えたビールを囲み、世に埋もれた若者たち（自分たちこそ決定的な力をもった新世代で、幸運にもこの世代が現れたからには、これまでの文学と芸術はすべてきれいさっぱり払底するだろうとのたまう輩）と、どんな新機軸も受け入れられないかちんかちんの石頭を乗せた二流文士たちが群れ集い、グジャレを言いあつたり、辛らつな言葉を吐いたり、馬鹿でかい声で朗読したり、互いの——つまり髭のない天才と髭の手入れが悪い保守文人の——胸ぐらをつかみ合つたりして、その激しさときたら、あわよくばブルジョア文学に革命を起こしてやろうという目的で書かれた自作の最新詩や散文を朗読するときと同じくらいでしたが、ともあれ、すべてはその範囲内に収まっていました。

たしかに事はバイアア州の範囲内に収まっていましたし（バイアア州全体です。首都のバイアア州だけではありません。議論はその後、カカオ地帯の市町村民に飛び火しました。この問題にかんして文学の夕べがもたれていたことが『イリュウス文学アカデミー年鑑』には明記されています）、この『年鑑』の補遺や修正版から関連記事は消滅しています。しかしだからといって、ドナ・フロールとふたりの夫のことや重要人物で第一級のヒーローであるヴァデーニヨのことが語られるとき、興味深くときには激しい議論が人々の注意や関心を惹かなかつたわけではありません。

今ヴァデーニヨをヒーローと申しました。ヴァデーニヨは、献身的で貞節な妻、このばあいはドナ・フロールという若妻ですが、その若妻を苦しめた卑劣漢であり下劣漢ではなかつたのか、という声が聞こえてきます。しかし、それは詩人や散文家を取り組む文学問題とはいささか無縁の別問題でしょう。おそらく文学問題よ

りも難しく、かつ深刻な問題だとさえ思います。この件にかんしてはみなさんご自身でご判断なさってください。もしこのささやかな文章を最後まで辛抱強く読んでいただけますなら。

少なくともこの哀歌のヴァデーニヨが議論の余地なきヒーローであることは明らかです。「星と骰子と娼婦と」／かくも親しき道化の華は／二度とこの世でまみえまい」と詩は謳っています。手放しの絶賛です。この詩は——論争のケースと同じで——文学目録にその名が載ることはありませんでした。しかし、だからといって価値がなかつたわけではありません。オドリコ・タヴァーレスとかいう、州レベルの詩人たちの噂を上空から俯瞰できる全国レベルの詩人が——ちなみに、二大新聞とラジオ局が独裁者の掌中に握られているため、こうした全国レベルの詩人たちはみな首根っこをつかまれていました——タイプ書きの哀歌を読んでこう嘆いたといえます。

「この詩が出版できないとは残念至極……」

「作者さえわかっていたらばなあ……」もうひとりの詩人カルロス・エドゥワルドもそう考えました。

このカルロス・エドゥワルド、古典に精通した若者でイケメンを鼻にかけていましたが、骨董聖人像の闇取引ではタヴァーレスの相棒でした。オドリコの日曜補遺に自分たちの名前が印刷される希望がいささかもないため屈託を抱えた二流文士と激越な若き天才たちの最右翼は、オドリコと、古い聖人像を受け取っていたカルロス・エドゥワルドをしきりに攻撃していました。聖人像は専門の強盗団が教会から盗み出したもので、その陣頭指揮を執っていたのが裏社会で盛名をとどろかせていたマリリオ・クラヴオです。ヴァデーニヨの友人であり仲間でした。瘦せて髭を生やしたこのクラヴオ、自動車の部品や鉄板や壊れた機械を辺りにずらりと並べ、そのガラクタを曲げたり繕ったりしながら抜け目なく芸術的価値のあるものを作り出しては、二人の詩人やその道の人たちからや

んやの拍手喝采を浴びていました。だれもがみんな、あの屑鉄を現代彫刻と称し、この卑劣漢を並外れた革命的芸術家の出現だと持ち上げていたのです。巨匠クラヴオの真の価値についてはもうひとつ別の問題があるのですが、その議論を展開していたらとても紙面に収まりませんので、ここで作品分析は控えることにいたします。ただその後、クラヴオの作品に論評を加えた者がいること、外国の三文文士の研究対象にさえなったことは、ご参考までに紹介しておきましょう。ただ当時はまだデビューしてでさしたる名声も博しておらず、いくぶん名が知れていたとしても、それはとりわけ聖具室と祭壇における問題含みの活動によるものでした。

噂によるとヴァディーニヨ自身、真底一文無しになったときには、異端者マリーオ・クラヴオの聖地巡礼、つまりレコンカヴォ地域の教会への密かな夜間巡礼に加わったこともあるようです。教会での盗みはたいへんな噂になりました。というのも、盗品のひとつが、アゴステイーニヨ・ダ・ピエダージ師の作とされる聖ベネディート像で、修道士たちが激しい非難を展開したからです。今日、貴重なこの像は南部博物館に納められています。毒舌の二流文士たちによれば、それは豎琴の詩神と誠実な商取引という二人の相棒（ふたりは当時まだ痩せて貧しかった）のおかげというわけですね。

その朝、昼食のまえに編集室で聖人像と聖人画の話をしていき、カルロス・エドゥアルドはポケットから哀歌の写しを取り出して詩人オドリーコに読んでみてくれと差し出しました。

出版できないことを嘆くと——「作者不明が問題じゃない。なにかしら偽名を使えばいいわけだから」原因はその卑猥な言葉にありました——タヴァーレスは「残念だ」と繰り返して、詩をもう一行、大声で朗読しました。

かくて喪に服するは、バイアアじゅうの黒人女、ばくち打ち

「作者は割れているのか？」

「あいつだろうか？ そんな気もするが、ただ……」

「まちがいない……いいか『ルーレットは黙り／売春宿に半旗は翻り／尻は絶望にすすり泣く』だぞ」

「あいつかも……」

「あいつかも、じゃない。あいつだよ。間違いない」と、ここで笑う。「あのいけぬかしいクソジジイめ……」

文学界で作者はそれほど自明なことではありませんでした。哀歌はさまざまな詩人、有名な詩聖、若い新人の作とされました。ソージェネス・コスタ、カルヴァーリヨ・ジュニア、アウヴェス・リベイロ、エリオ・シモンイス、エウリーコ・アウヴェスの名が取りざたされました。最もありうる作者として多くの人が名前を挙げたのがロバト。あの抑揚豊かな声を響かせて朗詠し、人々を熱狂させたからでしょう。

あの男とともに消えたのは／月に跨がる夜明けであった

ロバトが他人の詩を朗読するなんて信じられなかったからです。たしかに当時の文学的環境において、他人の詩を朗読するということはあまりありませんでした。しかし人々は、このソネット詩人が生まれつき鷹揚な性格で、他人の作品に心酔し、拍手喝采をおくるだけの器量もちあわせていることを忘れていたのです。

いつ哀歌が成功を博し、そのためにいつ論争が起きたかさ、え言うことができません。あれはカルラ、そう「デブのカルラ」の売春宿の、あの愉快な晩からです。イタリアから船でやってきた「デブのカルラ」はその筋でも有能なプロでしたが（しかも、知性と旅の多さで名高い玄人ネストル・ドゥアルチによれば、カルラはあれに「卓越していた」そうです）、教養が職業上の範囲をはるかに越えていて、ダヌンツィオに精通し、詩が大好きでした。「牝牛のごとく

ロマンチック——いつとき内縁関係にあった黒髭のクラヴィオはカルラをそう評しています。カルラは劇的な情熱なしではひとときもいられないたちで、ため息に噎び、嫉妬に身を焼かれ、ボヘミアンからボヘミアンへと渡り歩いていました。青い眼とプリマドンナの胸と驚異の太ももを震わせながら。ヴァデーニヨもまたこの女から寵愛と小銭を受け取る権利を有していました。もつとも、ロバトが感嘆していたように、「詩才と靈感溢れる心地よいダンテの言葉」で自身が試作するカルラは、詩人の方が好みでしたが。

毎週木曜の晩、カルラは広々とした寝室で一種の文学サロンを開いていました。やってくるのは詩人、芸術家、ボヘミアン、州高等裁判所判事アイローザのような大物いくたりか、詩に拍手を送り小話に笑いたくうずうずしている売春宿の娘たちです。飲み物とつまみが出されます。

カルラが夜会を仕切っていました。クツシヨンでふかふかのソファに寝そべり、ギリシアのチュニカと宝石を身に着けて、ハリウッドのギリシア人かエジプト人といったでたち。まるでついさつきオペラから抜け出してきたみたいです。詩人が詩を朗読し、気の利いた言葉や辛らつな警句を交わし、だじゃれを応酬する。州高等裁判所判事は一週間苦勞して考えてきた格言をおもむろに言い渡します。宴もたけなわになると、家の主人カルラが、偽宝石で覆われた白い樽のような巨体を枕のあいだからむっくり起こすと、あの巨体からは想像もできないほどか細い声で、最近読んだものから厳選した甘いイタリア詩を朗読する。そのあいだに芸術家クラヴィオと粗野な物質主義者は、サロンを領する薄暗がり——詩がよく耳に入るようにこうして部屋を薄暗くしているのです——をいいことに、また周囲のスピリチュアルで崇高な雰囲気にもおかまいなしに、娼婦に厚かましい痴漢行為を働いて売春宿の金庫を侮辱するという不屈な行為におよぶのです。

文学の夕べは、夜も更けるときまって詩から卑猥な小話へと落ち

てゆきます。そうなるヴァデーニヨ、ジョヴァンニ、ミランダン、カルリーニヨス、マスカレニーヤス、そしてとりわけレフの一番です。駆け出しの建築家であるレフは、移民の息子。キリンのように上背があり、レパートリーは無尽蔵で、無類の話上手でした。発音不可能なロシア語の姓をもっていたので、娼婦たちは銀の舌のレフと呼んでいました。銀の舌とはたぶんその小話に敬意を表してのことでしょう。たぶん。

こうした「知性と感性の洗練された出会い」のある日、ロバトがその震える声でヴァデーニヨの死に捧げる哀歌を朗詠したので。朗詠に先立ってロバトは、「愛と詩の甘美な巢窟」に通うみんなの友人であった故人の死から受けた衝撃を語り、そのなかで、詩の作者が「公表と栄光の太陽よりも匿名の霧」を好んだことにふれました。ロバト自身は、ヴァデーニヨの友人でもある軍事警察の将校クリゾーストモ大尉から詩の写しを手渡されたそうです。ただ、この軍人は詩を作ったのがだれなのか、確かなところを言うことができませんでした。

多くの人がロバト本人の作だと噂していましたが、ロバトが頑固に否定していたため、作者疑惑は次第しいに町で詩を書く者全員へと及ぶようになり、とりわけ自由気ままな夜型ボヘミアンたちが疑われました。とはいえ、あいつは控えめな男だから、とロバトの否定を決して真に受けず、ロバト作に固執し続ける者もいました。哀歌はロバト作の詩節だと考えるものは今も後を絶ちません。

論争が激化して、ときには文学や社交の則を越え、平手打ちの対立にまで昂じることがありました。あいも変わらずモデロ市場の悪臭ぶんぶんたる葉巻を吸い続け、警句を口にするときにはこぞとばかりに毒をまき散らす詩人クローヴィス・アモリンが、例の詩の作者はどう考えたところで吟遊詩人エルメス・クリーマコではありえない、あいつには才能も文法力もないからな、と言ったときがそれでした。

「ジ・クリーマコだつて？ ばかいつちやいけない！ あいつときたら、うんうんうなつて七音節の四行詩をひり出すのがせいっぱいだ。便秘詩人だよ……」

運の悪いことに、そのとき居酒屋の戸口に当の詩人クリーマコが現れました。例によっていつもの黒い服とゴム合羽を着て、そしてこれまたいつも雨傘をもっています。雨傘を振り上げると、怒りにまかせて食って掛かりました。

「便秘はおまえを生んだ売女だよ……」

ここで取っ組み合い、罵り合い、平手打ちの応酬とあいなるわけですが、三文詩人としてもアスリートとの遅しさとしても上手のアマリンが優勢であることは一目瞭然でした。

これに劣らずおもしろく、かつ報告に値する出来事があります。貧弱なノート二冊分の詩を書いたことしかないなんとかという男に、思慮深さにおいてさらに劣るいくにんかが哀歌の作者の榮譽を与えてしまったのです。最初のうち男は強く否定していましたが、周囲が言い募るうち、否定の仕方がだんだん弱くなつていつて、ついには否定が肯定の弱々しい偽装だととれるほど臆病で曖昧な態度を取るまでになりました。

男が手をこすり合わせ、目を伏せ、微笑んで、「私の詩に似ているといえ、たしかに似てはいる。が、しかし……」などともご言うところを見て、周囲は「この人だ、この人に違いない」と言うわけです。

男は相変わらず否定し続けてはいました。しかし、問題の詩が誰か別の人の作だとされるとけつしてそれを認めないのです。そんなことを言う奴が現れようものなら、仮説が不可能であることをむきになって証明する。それでもしつこく言い張る輩がいると、はつきりしない決め言葉を不機嫌そうにこうぶつぶつぶやきます。

「はてさて、そんなことを言うつもりかね、この私に……いくらでも反論できるんだよ……」

そして哀歌を朗読する者がいると、朗読にじつときき耳をそばだて、入れ替えた単語を指摘して、まるで自分の作品にでも執着するように熱心に訂正するのです。後になってやっと本当の作者の名前が判明し、不当な栄光をばく奪されることになりましたが、するとこの男、今度はこの哀歌を悪しざまに言い募り、なんの長所も美点もないと述べ立てるのでした——「売春宿の糞みたいな詩だ」と。

こうした論争のただなかで哀歌は広まってゆき、カシャヤが最も高貴な感受性を花開かせる明け方のパールのミサで読まれ、暗記され、暗誦されました。朗読者は形容詞と動詞を替え、ときには詩節を混同したり呑み込んだりしていました。しかし、正しかろうが間違つていようが、カシャヤがしみ込んでいようがキャバレーの床に落ちようが、哀歌はヴァデーニヨをほめ讃え、称賛しながら広がっていったのです。

だれが作ったにせよ、哀歌は、思春期から一種のシンボルとなつて生涯を閉じるまでのあいだヴァデーニヨが動き回つた裏社会全体の気持ちに反映していました。若いばかり打ちに捧げられた賞賛の絶頂だったのです。こんな賞賛と思慕の言葉を耳にしても、ヴァデーニヨはきつと信じなかつたでしょう。なにしろ生前は賞賛やお世辞とはいっさい無縁で、それどころか、周囲の人々は叱責と忠告、暮らしぶりと感受性の荒つぽさにたいする説教ばかりをヴァデーニヨの耳元でがなり立てていたからです。

もつとも、ヴァデーニヨの悪行にたいする寛大さ、その長所とされるものを公に誇示することにたいする寛大さは、詩のなかのヒーローと、ほとんど伝説的な人物像へと収れんし、長続きしませんでした。死後一週間もするともう変化の兆しが見え始め、道徳と品位に責任を負う保守階級の意見が、代母や近所の女たちの口から発せられるようになります。ヴァデーニヨにたいする賛辞を、売春宿と賭博場に巢食う最下層民が古来のしきたりと体制を切り崩すよこしまな試みのなかで広める無政府主義的で退廃的な賛辞と重ね

て見ようとするようになる。

こうして新たな悩ましい問題が現れました。まるで詩の制作という問題ではもはや満足できないかのよう。この詩の制作という問題については本物の作者から証拠の提出が約束されました。本物の作者は現在明らかになっており、祖国の文学史のなかに金文字で永遠に書き記されています。

ヴァデーニヨの死後数年たったころです。詩人オドリーコは本物の作者から送られてきた『不純な哀歌』——無料にて献呈された三冊のうちの一冊——を受け取りました。カラサンス・ネートの木版画の挿絵が入った百部限定の豪華版。カルロス・エドゥワルドに顔を向けると、豪華なその本を手渡しました。

二人の友人は、遠い日に一緒に哀歌を読み議論したその同じ編集室に坐っていました。今ではふたりとも押し出しの立派な紳士です。それに金持ち。骨董品のコレクションと不動産をもつほどの大金持ちです。

オドリーコが昔を思い出しながら言いました。

「あのときおれは言わなかったか？ あいつだつて」そしてあのときと同じように笑い、あおのときと同じようにこう付け加えました。「あのいけ図々しいクソジジイめ……」

カルロス・エドゥワルドも心の底から笑いました。一家を成した男の、余裕に満ちた笑いです。そして稀覯本に見ほれます。表紙には、詩の著者ゴドフレード・ジュニアの名が木に彫り込んである。

ゆつくりとページを繰りながら（いささか嫉妬を感じつつ）こう思います。「どんな密かな通りと坂道が、どんな薄暗い黄昏の小道が、どんな香たつ闇の洞窟が、名高い詩人と貧しいのらくら者ともども発見し、愛したのだろうか？ 友情という稀有な花をふたりのあいだに開かせるまでに」。こうした謎をつらつら思いながらカルロス・エドゥワルドはまるで女性の滑らかな皮膚を愛撫するように紙を撫でます。夜のビロードのように黒い肌と言ったらよいで

しょうか？ 一巻を構成する五編の詩の四番目がヴァデーニヨ、つまり「敷物の上に忘れられた青い賭け札」の死に捧げられています。

かくして、お約束どおり問題は解決いたしました。ただし、別の問題が現れてきましたが。はたして解決がつかうかわからない問題です。ヴァデーニヨのその謎の解決は、みなさんの洞察力に委ねられています。

ヴァデーニヨとはいったいどれか？ その真の表情は？ 正確な比率は？ その人間としての顔はたつぷり陽光を浴びていたのか、それとも陰に覆われていたのか？ 哀歌に歌われた道化なのか？ パラナグワ・ヴェントウーラの文章の金槌なのか、それとも見下げてたごろつきなのか？ 懲りないたかり屋なのか？ ご近所の女性やドナ・フロールの友人たちが言うように、ろくでもない夫なのか？ だれがヴァデーニヨをいちばんよく知っていて、だれが今いちばんうまく説明できるのか？ サンタ・テレーザ教会の六時のミサに足しげく通う敬虔な女性信徒なのか、それともタバリス通いが止められなくなってしまった男たちなのか？ 「ルーレットのなかで転がる玉なのか？ トランプと骰子^{ダイス}なのか？ 最後の賭けなのか？」

(第一部 完)